全体会議

コメンテーター　福岡教育大学　教授　井上　豊久氏

ご紹介いただきました井上です。

現在福岡教育大学で生涯学習、ボランティア実践入門など、外部では日赤大学でボランティア論などの講座を持ち、ボランティアの研究をしています。福岡県の方でも社会教育委員会議の議長も努めております。

本日は各分科会を回ってまいりました。どこも実に活発でしたが、もっとも燃えていたのは街巡り（歴史ガイド）ボランティアの方たちではという感じでした。それぞれの分科会で特色を出しながら意見の交換をされていました。基調報告では福岡方式という言葉がでていましたが、これは新しい活動のスタイルで、大変いい方向に進んでいるという印象を持ちました。

本日は最初に１０分ずつ各分科会より報告を頂きます。それぞれ皆さん所属されている分科会のことはご存知ですが、他の分科会にもいろいろと参考になることが多いと思います。先ほどの新しい形の活動スタイルとか、助成金・経費など金銭に関る問題などもあるようです。他の分野の方と諸問題を共有し解決にあたるとともに、これからも文化ボランティア全体に支援頂きますよう、またご自身の活動の充実に役立てて頂ければと思います。

各分科会（コーディネーター）からの報告

１）読み聞かせ（図書）ボランティア

コーディネーター　前福岡県立図書館　副館長　河井　律子氏

読書ボランティアとはどういうものか、ご存じない方もいると思いますので、少しだけどういうものか、お話したいと思います。子供と本を結びつける為の活動をしている人たちの事を読書ボランティアといいます。唯、本を読んであげればいいと思っている方もいるかもしれませんが、なかなか奥深いもので、かなり勉強を必要とする活動です。

そういう活動を皆さんが工夫してやっているのですが、今回は三つの団体から報告をいただきました。

先ず、志免町の、おはなし会“ねっこぼっこ”の報告です。

「子どもたちの笑顔に会いたくて」、このテーマネーミングは、読書ボランティアを大変よく表していると思います。この“ねっこぼっこ”は昭和 57 年からの活動で、とても息の長い会です。その息の長い活動のポイントは、できる人が、できる所で、というスタンスで、参加できる環境をきちんと整えていることです。そこが活動のポイントだったのではないかと思いながら報告を聞いていました。

全員１８名のメンバーで、実働７名にて年間３００回を越える活動回数をこなしています。もの凄いバイタリティ溢れた会で、他の１１名の、「読み聞かせに自信がない」と言われる方達は、読み聞かせに関するいろいろな、ものを作る製作部門を担い、共働しているそうです。

課題としては、平均年齢が６０歳を超え、後継者づくりが悩みだそうです。対策として新しく学校ボランティアを立ち上げています。将来的にはそこから”ねっこぼっこ“にも参加してもらい、お互いに共働することを目指しているそうです。

子ども達夫々の年齢に相応しい本を、きちんと選び手渡す事は大変な事で、専門的知識を必要とします。このグループの凄いところはそういうことを踏まえ、的確に本を選び、

その後のプログラムもきちんと作って、子供達が紹介してもらった本をすぐ自分達で手にとって読めるようなアフターケアーをしていることです。

次に“春日市の子ども文庫・読書サークル連絡会”の報告です。
ここは図書館や学校などで活動していた小グループ１５団体が集まり、図書館と連携し立ち上げた会です。省略して“文庫連”と称しています。本日は「図書館との連携による地域の活性」というタイトルの報告でした。

この文庫連の立ち上げに当たっては、図書館と緊密な話し合いを重ねながら、多くのいろいろな会合にも参加、意見を聞き、また他の図書館を視察し、参考にされたそうです。代表者会等ありますが、そういう機会には必ず勉強会を行うことで、資質の向上を図る事を常に心がけています。

また図書館以外にも春日市内には“小学校読書ボランティア交流会”が活動しています。ここを立ち上げる時も“文庫連”がしっかり支えました。今ではそこもかなり力がついてきて“文庫連”が少し退いて、実行委員会形式で“文庫連”と共働しています。

ここのポイントは、世代交代が上手く行われていることで、先程の“ねっこぼっこ”の平均年齢が６０歳といいましたが、この会はここ数年の間に世代交代がうまく進み、今は３０～４０代の人が中心と成って運営にあたっています。

読書・読み聞かせは、子育て中の主婦が関ることが多いのでどうしても子供が病気になったりして、活動に行けなくなるようないろいろなトラブルが出てきます。そんな時誰かが必ず代われるという体制が出来ている事が、新しい人、若い人達への世代交代が上手く行われている大きな要素だと思いました。

三番目に“そらいろ文庫”より、「活動１０年を振り返って」という題での報告でした。
ここは公民館図書ボランティアとして１０周年を迎えたグループです。公民館と図書ボランティアの共同運営で、かなり資金面で公民館のバックアップを受けながら活動しているということです。

一般的には、少子化現象、また子ども達の日常行動も大変忙しくなってきている為か、子ども達の公民館文庫離れが起きているといわれている中、ここではお話し会などに５０～６０名の子供が集まるそうで、見事成功している事例の一つだと思います。

公民館便りで広報する他に、小学校の子供達、一人一人に一枚ずつチラシを配る努力もしています。このグループも出来る人が、出来る時に、出来る事をして活動を楽しむ運営をしています。１０年経っても創設メンバーがほとんど残っているそうです。

このような形で活動を活性化、継続していますが、大きな課題は子ども達が高学年になるにつれ、公民館文庫にこない子が多くなるという、高学年の文庫離れだそうです。

今後、息長く続けていく為に、自分達が心がけたい事として、メンバーと充分なリレーションづくりと、公民館との共存共栄、自分達のスキルアップ、誰でも参加し易い環境づくり、それにこの活動を楽しむ仕組みづくりを今後の方向付けとしています。

この後は本日参加団体各グループの情報を提供して貰いながらお話合いを進めました。今回の分科会で、強く感じたことはボランティアの皆さん、とてもよく勉強されている事、それにグループづくりに一生懸命努力されている事です。一番の課題は世代交代ではないかと思います。

コメント　井上　豊久氏

多彩な読み聞かせボランティアが県内で活躍している様子がわかりました。市町村によりネットワークなど多少格差があるようにも感じました。本日をきっかけにさらに充実した活動になればと思います。

２）街巡り（歴史ガイド）ボランティア

コーディネーター　福岡県観光ボランティア連絡協議会　会長　上村　敏和氏

私どものグループには１４団体５７名と大変多くの方に参加していただき関心の深さを実感いたしました。

“NPO 法人歩かんね大宰府”から「歩かんね大宰府～気持ちよかやん　風も人も～」という題にて報告がありました。

歩かんね大宰府は、春（３月～６月）秋（９月～１２月）の行楽期をピークとして、年間１，１００名のお客様をご案内しています。

丸ごと博物館を目指す、太宰府の良さを、来訪者に知って頂く為、メンバー３０名を中心に、参加者と楽しい会話を交わしながら交流、ある時は皆で新しいコースを手作りしながらその過程をも楽しんでいます。

「気持ちよかやん　風も人も」というスローガンの下に地域と繋がりを深める活動を重ねながら頑張っています。

次に宗像の“宗像歴史観光ボランティアの会”による報告です。現在の宗像市は、旧宗像市・玄海町と大島村が合併して平成１７年に新しく誕生しました。

春には鎮国寺の花祭り、秋には宗像大社の菊花大会があります。この二つの大きな祭りを中心にご案内をしています。中でもツアーガイド（バス）参加者は、昨年まで年間５００名余りでしたが今年は５，０００名余のお客様をご案内する見通しだそうです。裏話では、皆様の努力により、宮崎交通の観光ルートとして設定にこぎつけた結果、飛躍的な数のお客様が貸し切りバスでみえるようになったそうです。

この二つの団体の報告の後、質疑応答となりいろんな意見が出ました。観光ボランティアだから無料で案内することが建前だという意見、一回につき５００円・１，０００円・中には３，０００円と有料でご案内しているところもありました。金額はまちまちで、このことにも多くの意見が出ました。

金額はさておき、自分達はボランティアでしているのだから無料であると思っていたが、お金を貰っている人もいるのか、という話など多くの意見が出てきて大いに盛り上がりましたが時間となり又の機会に皆様と話合いたいと思います。

コメント　井上　豊久氏

有難うございました。最初の基調報告にもありましたように、国土交通省管轄の観光ボランティアと文化ボランティアとは少し分野が違う、と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、こういったいろんな分野のものを含めながら、文化ボランティアとしてとらえ、拡充していくことが新しい流れでもあります。最後にホール・劇場ボランティアの報告を願いします。

３）ホール・劇場などのボランティア

コーディネーター　アートサポートふくおか　代表　古賀　弥生氏

最初に“サザンクス筑後運営ボランティアについて”という題で、（財）筑後市文化振興公社からの報告です。

サザンクス筑後は開館前からいろいろなボランティア講座を重ね1995年に開館しました。2004年のとびうめ国文祭では、市民によるミュージカル劇の創作、合わせて太鼓によるミュージカルフェスティバルを行いました。この国文祭のイベント実施を機会にボランティアの人数が飛躍的に増えました。

現在登録されているボランティアは２０団体３００名にのぼるそうです。この方々の活動は敷地内の草取りやチケットのもぎりなどいろいろあります。

そのような活動を促進する為の工夫として、「サザンカ通貨」という地域通貨を独自に発案しています。この地域通貨は一定の狭い地域の中で、例えば足が不自由な高齢者の買物手伝いといったボランティアをしたとき一種の対価として、現金ではなく地域通貨を発行し、それを通帳に記載して、自分がボランティアをして貰う立場になったとき、貯まった地域通貨を自分が利用できる仕組みです。

地域通貨を文化施設に導入したのは非常に珍しい事例で、おそらく全国でも１～２例ではないかと思います。さざんかは筑後市の市花で、「サザンカ通貨」の単位はサザンクスの「クス」です。こういった地域通貨を独自に設定し、ボランティア活動をすると「クス」が貯まり、その「クス」は主催事業のチケットの購入、施設を借りる時の使用料、グッズの購入等と色々な使い方が出来ます。

課題もいくつかあり、例えば２０団体３００名が登録されていますが、実際には登録者全員が活発に活動しているわけではなく、高齢化や一部の人に限定されているところもあり、新しい人をどう取り込むかという事も課題の一つです。

また基調報告の中にもありましたが、例えば本日の分科会の、街巡りボランティアや読み聞かせボランティアは、市町村或いは県内で活動している人の名簿の整備等完備され、組織化も進んでいるのに対して、ホール・劇場ボランティアは実態がつかめておらず、組織化も進んでいないことも課題です。サザンクス筑後のボランティア活動も、長く続いているものの、組織化あるいは自立という面ではリーダー不在の状況で、活動があるとき、ホールスタッフが参加を呼びかけ、それに呼応して活動に参加するパターンで、なかなか組織化や自立が出来ていない実状です。

サザンクス筑後の場合、ホールで機材を扱うこともあり、技術面の知識も必要としますし、お客様に対する接遇など、若干専門性の高い活動が求められるという特殊な事情もあり、ボランティアにどこまで任せられるかというところが、自立への難点になっているようです。

サザンクス筑後は運営を担うのは指定管理者の筑後市文化振興公社で、契約期限が５年に区切られていて、その後は別の団体の運営になることも考えられ、職員がノウハウを蓄積することが難しいという指定管理者制度がもつ課題もあります。

続いて“想いをカタチにする～人財づくり講座事例報告～”という題で春日市ふれあい文化センターの報告です。

春日市ふれあい文化センターが取り組んでいるのは**人財**づくり講座です。この講座はふれあい文化センターの機能やいろいろなものを活用して、文化のまちづくりに自ら取り組

めるような人材を育成する事業です。従って、イベント時のチケットのもぎり、パンフレットの配付といったボランティア活動とは異なり、ホールを中心にして文化のまちづくりに取り組めるような人をホールがつくっていく事業です。

「文化のまちづくり」をテーマとしたレクチャーを幾度か受けた後、企画書作りのワークショップを行います。最終的にはふれあい文化センター主催事業の一枠を、受講生が企画立案し、企画書を提出。職員が審査をし、その中から一案選んで実際に運営まで任せるという流れになります。受講者は毎年変わりますが、このような講座を三年間連続で実施しています。

課題はいくつかありますが、例えばどのようにして、どのような人に、広報をすれば新しい人材に巡り会えるのか、市内近郊も含めて、どのような活動をしている人が、どのような想いを持っているのかを、ふれあい文化センターは必ずしも把握しているわけではありません。特に若い人に集まって欲しいと思うとき、どのような PR で拡げていけばいいのかが難しいということでした。

成果として、目的は文化のまちづくりということでしたが、今年度の受講生の中には、全員で講座の一環として取り組むワークショップとは別に、個人の企画を実現した人も誕生し、自主的な活動ができる人材が生まれつつあることです。

ふれあい文化センターの取り組みは、ボランティアという言葉から考えると少しはみ出しているところがあるかもしれませんが、なぜこのような事例を紹介しているかというと地域における文化施設・ホールの役割は、文化鑑賞の機会を提供していくという事だけでなく、文化を通じて地域を元気にしていくということも、文化ホールに求められている役割だからです。

ホールでイベントをする、演劇を見たりコンサートを聴きに来てもらうことも大事だと思いますが、それだけでなくホールを中心として、地域が元気に成っていく為にホールは何をしたらいいのか、その為に市民とどう繋がっていくべきかということが、今、文化施設・ホールの課題ではないでしょうか。

これを解決する一つの方策としてボランティアと市民がどのように繋がっていくのかという動きになり、ふれあい文化センターの人財づくり講座、あるいはサザンクス筑後のボランティアとの関り方ということになるのだと思います。

それぞれに共通する課題としては、繰り返しになりますが新しいメンバーを如何にして集めるか、組織化という難題をどのように解決していくかではないでしょうか。

サザンクス筑後が指定管理者ゆえに職員が変わってしまうというところは、直営である春日市ふれあい文化センターも人事異動があるので同じです。従ってノウハウがなかなか蓄積されにくいのは、ボランティアと関る部分だけではない文化施設が抱える大きな課題として指摘いたしましたが、解決策の議論までには至りませんでした。

新しいメンバーを如何にして集めるか、組織化をどうするか、を中心に会場から意見質問を受け話題になったことをまとめてみました。

例えば施設の中にボランティアのたまり場を設けていますか、という質問がありましたが、現状はホールのボランティアがホール内の会議室などを自由に使えないところが多いのです。本日事例報告をされた二団体にもそういう部屋はないということでした。たまる場所があるとコミュニケーションの促進につながり、新しいメンバーをいかにして集めるとか、これから私達どうしていく、といった話が進み、次の展開につながる可能性もある

ので、たまり場を作ることも必要であるという話になりました。

北九州芸術劇場のお話では、サポーターと呼ばれるボランティアがおり、二年間の活動後、卒業された人達を OB と呼んでいるそうです。すでに数期重ねているので OB の方たちの緩やかな集まりが出来つつあるそうです。そのような OB の方たちが溜まれる場所があると現役の人達との交流であるとか、ホールスタッフ、職員との繋がりが出来てくる可能性があると思いました。

ホールがその地域においてどのような存在であるべきか、人と人とをつなぎ温かい社会を、それから良き市民を作っていくというホールの役割を果たしていく為に、ボランティアとの繋がりを重視することや市民と一緒に運営していく方法を考えていくことはセットだと思います。このことを踏まえて、文化ボランティアと今後どのような活動を続けたらいいのかを考えていくべきだと思いました。

最後に組織化されていないという現状ですが、このようなフォーラムをきっかけとして、ボランティア活動をしている方々の横の繋がりができていったらいいと思います。

コメント　井上　豊久氏

有難うございました。私も５年前にスペインのミロ美術館に入ったとき、最初から最後まで、まだ若いボランティアの方に案内してもらい、美術館に於ける活動も、小さい頃から美術に親しむ体験が出来ていいなと思いました。